ローナ・シンプソンとその視線

― 社会の暗部を見る ―

B－19　　竹澤　公美子

目次

序　章

第 1 章　ローナ･シンプソンという人
(1)　ローナ･シンプソンの経歴
(2)　ローナ･シンプソンの地理的背景
(3)　ローナ･シンプソンの文化的背景

第 2 章　社会の暗部を見るということ
(1)　社会の暗い部分
(2)　ローナ･シンプソンが作品で扱うテーマ

第 3 章　「人種」とシンプソン
(1)　人種とは何か･人種差別とは何か
(2)　アフリカ系アメリカ人の歴史―現代
(3)　シンプソンと人種差別

第 4 章　「性差」とシンプソン
(1)　性差とは何か･性差別とは何か
(2)　女性と男性―アフリカ系アメリカ人の場合
(3)　シンプソンと性差別

第 5 章　作品創作の方法と姿勢

終章

終わりに

参考文献

序　章

ローナ･シンプソンという写真家を初めて知ったのは、高校生のときであった。

確か、読売新聞の文化面に連載されていた『アメリカ　写真の世紀』というコラムで紹介されていたと思う。そのとき掲載されていた写真にとても心を引かれたのだ。

その写真は、ハイヒールやローファーなどの靴が、異なるもの同士片方ずつ組み合わせられて、ひとつのペアになっているものが５ペアずつ並んでいた。異なる靴の組み合わせも奇妙であったが、それ以上に奇妙だったのは、それらの靴の下に、それぞれ “she” や “he” などと記されたプレートがつけられ、しかもそれが靴の性別と必ずしも一致していないことであった(例えばハイヒールは女性のはくものだが、その下につけられたプレートが “he” であるなど)。

『アメリカ　写真の世紀』というコラムは、それまでにも何回か目を通していたのだけれども、ローナ･シンプソンのこの作品が特に強く印象に残った。最初は多分、そのシンプルで余白の多い綺麗なヴィジュアルに、そして次に綺麗だけれどもどこか奇妙な不思議さ・ちぐはぐさに惹かれた。５つの枠の中に、奇妙な靴のペアとプレートが１組ずつ整然と並んでいる様子は、一見シンプルで綺麗だけれども、妙に崩れた感じがする。その崩れた部分、綺麗なのにどこか外れている部分に、とても興味を持ったのだ。

「ずれ」だとか、「崩れ」というものは、切り捨てられがちな要素だけれども、実はそれを切り捨ててしまうと面白みがなくなる。また、ずれや崩れを排除することで、バランスが崩れてしまうこともある。先ほどのシンプソンの作品を例にすると、ひとつのペアの靴が片方ずつ異なる靴であり、アシンメトリー(非対称)であるから面白いのであって、もし両方とも同じ靴であったら、確かにシンメトリー(対称)で綺麗ではあるけれども、ただそれだけに終わってしまい、興味を持たなかっただろう。そして、シンプソンの作品を見ると、「(デザイン的・ヴィジュアル的に)綺麗なのにどこか奇妙」な作品がとても多いことに気づく。

ひるがえって、この「ずれ」や「崩れ」を、社会という構造物の中で考えてみると、それは例えば顧みられなかった歴史であったり、社会的弱者であったり、つまりは社会の暗い部分、忘れられがちな部分なのではないだろうか。より「完璧な」社会にするために、時として人は、この暗い部分を排除しようとしてきた。しかし、この暗い部分を排斥しようとして不幸な結果を招いた歴史は数多くある。

シンプソンの視線は、まさにこの社会の暗部に向けられている。彼女の作品は特に、アフリカ系アメリカ人の女性をテーマにし、モチーフにしているけれども、私は彼女の作品を見るとき、同時に他の社会的弱者や社会の暗部についても考えてしまうのだ。彼女が何を思って作品を作るのかは、結局彼女自身にしか分からないだろうが、少なくとも私は、私が彼女の作品を見るときにそういったことについて考えるのは(その他の理由があるにせよ)彼女の視線が社会的弱者に向けられたものであり、作品から「社会の暗い部分に目を向けて欲しい」というメッセージが暗に発されているからだと思う。また、後付けの理由に過ぎないが(理由とはたいていそういうものだけれど)、私が彼女の作品に惹かれた理由のひとつは、私自身が一般的には社会的弱者に分類され、人より少しばかり社会的弱者に関する問題に敏感だからかもしれない。

ともかく、このレポートで少しでもローナ・シンプソンについて知り、何かしら考えていただければ幸いである。

第 1 章　ローナ・シンプソンという人

(1)　ローナ･シンプソンの経歴

1960	ニューヨークのブルックリンに生まれる
1982	School of Visual Arts で BFA(Bachelor of Fine Arts) 取得
1985	ｶﾘﾌｫﾙﾆｱ大学ｻﾝﾃﾞｨｴｺﾞ校で MFA(Master of Fine Arts) 取得
	芸術国民基金(National Endowment for the Arts)から奨学金
	初の個展をｻﾝﾃﾞｨｴｺﾞで開催

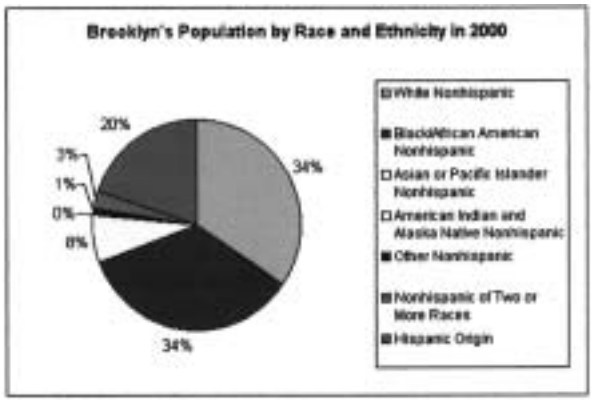
ローナ・シンプソンはニューヨークのブルックリンに生まれている。ニューヨークのブルックリン地区はアフリカ系アメリカ人を含む黒人(以後黒人と表記)の多い地区で、シンプソンは幼少のころから貧しい黒人たちの現状を目にしてきただろう。しかし、彼女自身は高校卒業後に School of Visual Arts、カリフォルニア大学サンディエゴ校と続けて二つの学校に進学していることから、黒人の中でも比較的裕福な家庭に育ったと思われる。

高校卒業後に、ニューヨークの School of Visual Arts に進学し、BFA を取得した後、カリフォルニア大学サンディエゴ校に進学し、MFA を取得している。

学生時代の彼女は、たくさんの文学作品、特に黒人作家の文学作品に触れ、写真家として発表してきた作品の基盤を築いていくことになる。このことについては第 3 節で述べるが、それらの文学作品から彼女は多大な影響を受けたようだ。

カリフォルニア大学サンディエゴ校を卒業したのち、本格的に写真家としての活動を開始していくことになる。そのような彼女はどのような環境に育ち、どういうものに影響を受けてきたのだろうか。

(2)　ローナ･シンプソンの地理的背景



http://www.bedc.org/popbyrace.htm

シンプソンが生まれ、写真家としての活動の拠点としているブルックリンという土地はニューヨーク市の中でもアフリカ系アメリカ人の多い地域である。アメリカ合衆国の人口に占めるアフリカ系アメリカ人の割合は 12.3%に過ぎないが、ブルックリン地区では 34%と、白人とほぼ同数の黒人が暮らしている。中でも中部ブルックリンでは 80%以上がアフリカ系アメリカ人で占められている。そこにすむアフリカ系アメリカ人の多くは貧困層であり、シンプソン自身は裕福な家庭であったとしても、幼いころから貧困にあえぐアフリカ系アメリカ人の現状を見てきたといえる。シンプソンが黒人差別問題に問題意識をもつようになったことは自然なことだといえる。

また、ブルックリンは芸術家の多い地区でもある。シンプソンが視覚芸術を志し、写真という表現媒介を用いて作品を発表するようになったことの一因として、ブルックリン在住の芸術家に影響されたことが考えられる。

(3)　ローナ･シンプソンの文化的背景

シンプソンは多感な学生時代に多くの文学作品に触れている。特に黒人文学を好んで読んでいたようだ。ジェームズ･ボールドウィン、ゾラ･ニール･ハーストン、アリス･ウォーカーなど彼女が影響を受けた作家について、少し触れてみることにする。

・ジェームズ･ボールドウィン (1924 -)
ニューヨークのハーレムに生まれる。小説『山に登りて告げよ』、評論集『アメリカの息子の物語』で、白人との関係における黒人という従来のとらえ方を打ち破り、個人としての黒人を掘り下げようとした。また、第 2 作目の小説『ジョヴァンニの部屋』ではアメリカ青年とイタリア青年の同性愛を描き、第 3 作『もう一つの国』へとつなげた。この『もう一つの国』では主要人物 9 名が、黒人と白人、男性と男性、男性の同性愛者と女性など、さまざまな組み合わせを用い、複雑な現代社会の中で、それぞれが自己を確立し、他のものと何らかの形で結びつくことを求めようとしている人間の苦悩を描いている。

・ゾラ・ニール・ハーストン (1891 – 1960)
フロリダに生まれ、1925 年にニューヨークに移住。文化人類学を学び、南部や西インド諸島での調査を元にブードゥー教や黒人民話を研究した中から数多くの文学作品を残している。中でも『彼らの目は神を見ていた』は、黒人少女が自我に目覚めていく過程を描いたフェミニスト小説の草分けである。ゾラ自身は 20 年代にあってすでに人種や性別を超えた宇宙的な思考をもち、自分のことを「コズミック・ゾラ」と呼んだ。

・アリス･ウォーカー (1944 -)
南部の小作農の家庭に生まれ育つ。1982 年に黒人女性作家としてはじめてピュリッツアー賞を受賞。多くの作品を発表し、女性解放運動の中心となった。彼女は、黒人女性が行っている女性解放運動は人種の壁を超えて、世界中の女性に広く浸透すべき運動であると提言し、これを「ウーマニズム」と呼んだ。作品には『メリディアン』、『カラー･パープル』、『喜びの秘密』などがある。

その他にも、ヌドザケ・シャンゲ、グロリア・ネイラー、オクティヴィア・バトラーなど、黒人女性解放運動に携わり、1970 年代後半から 1980 年代後半にかけて作品を発表した作家たちの作品に影響を受けたようである。

また、注目したいことのひとつに、1976 年に発表された『ルーツ』(アレックス･ヘイリー)の存在がある。この小説は、著者が自分の祖先を探してアフリカの地にまでたどり着き、自分の出自を発見するまでのことが記されている。また、これは 1977 年にテレビドラマ化されて放映されたので、当時 16 歳のシンプソンが見た可能性は高い。

また、シンプソンは、これらの作家と小説から、言葉に対する真摯なまなざし、厳しい見方を身につけ、言葉が機能する方法や言葉を使う方法を知ったと述べている。“Their work helped me to take a hard look at language—the way that it functions and the way we use it.” (Deborah Willis, *Lorna Simpson*. New York: D.A.P/Distributed Art Publishers, 1992.)

第 2 章　社会の暗部を見るということ

(1)　社会の暗部

物体に光が当たると光が当たって明るい部分と光の当たらない暗い部分が出来るように、ものごとにはすべて明るい部分と暗い部分がある。暗い部分が明るくなれば今まで明るかった部分が暗くなるように、明るさと暗さは常に一体のものである。生があれば死があり、幸せがあれば不幸せがある。強者がいれば弱者がおり、健康な人がいれば病人もいる。そして私たちは、自分が暗い部分に身をおいてはじめて明るさを感じるのである。ひるがえせば、明るいところにいるとき私たちは暗い部分のことをほとんど考えないということだ。意識しなければ、私たちは暗い部分があることすら決して考えないだろう。

私たちが暮らしているこの社会には、実に多くの暗部が存在している。毎日大量に食料品がゴミとして廃棄される国がある一方で、その日の食べ物にも事欠いて餓死していく人がたくさんいる国がある。白人が優遇されるかたわら、黒人は差別され、仕事では男性がきちんと待遇されるそばで女性は不当な待遇を受けている。太っていたり、手足が不自由だったりという身体的特徴から差別を受ける人々も未だに多い。

私は、これらの社会の暗部について常に考え、それについて何か対処せよとは言わない。それは個人レベルの問題ではないからだ。しかし、暗い部分について認識し、それについて考えてみることも時には必要であるかもしれない。私たちは、どこかしらに暗い部分を抱えている。明るい部分も暗い部分もすべて、私たちが今生きている社会であり、私たちはいつ、どちらの部分に属してもおかしくない存在だ。暗い部分を、そして社会を認識することは、すなわち自分を認識することでもあるのではないだろうか。

ローナ･シンプソンは、彼女の作品で社会の暗部に目を向けてもらおうとしているのだろう。それは特に、アフリカ系アメリカ人の女性をモチーフにし、扱うテーマは「人種」と「性差」がほとんどであるが、彼女は解釈をこれに固定してはいない。私たちが今いる環境、育ってきた環境によって、彼女の作品をどうとらえるかは違う。だが、彼女が伝えるメッセージは「社会の暗い部分を顧みる」ことであると思う。

(2)　ローナ･シンプソンが作品で扱うテーマ

ローナ･シンプソンが作品としてあらわしているテーマは 2 つある。「人種」と「性差」だ。これは彼女自身が「アフリカ系アメリカ人」と「女性」という 2 つの暗い部分に属しているからだろう。彼女が一番よく認識している(せざるを得なかった)ことが、この「人種」と「性差」なのだと思われる。作品として形にするほど彼女の中でこの 2 つのテーマのエネルギーが多かったのだともいえる。そこで、まず「人種」と「性差」について考えたい。

第 3 章　「人種」とシンプソン

(1)　人種とは何か･人種差別とは何か

人種の問題は、私たち現代の日本人にはなじみの薄い問題である。だから私は人種差別というものを実感できない。しかし、ローナ･シンプソンとその作品について考えるとき、人種について知っておくことが必要だと感じたので、ここで 1 章を割いて人種差別の問題、特に黒人差別について述べよう。

人種とは、国語大辞典によれば、

> 共通の遺伝的特徴をもつ人の集団。通常皮膚の色、容貌、骨格など身体の形態的特徴を同じくする人の自然的な群をいう。ふつう、コーカソイド(白人)・モンゴロイド(黄色人)・ニグロイド(黒人)に大別され、それぞれをさらに数種に区分する。(金田一春彦　他編『国語大辞典(新装版)』(小学館、1988 年))

と記述されている。

ここで、人種差別といえば、これらの人種(身体的特徴)によって、人々の社会的な地位や権利などを差別することである。例えば、古くは日本でも北海道のアイヌ民族を差別・迫害してきたし、ナチス支配下のドイツでユダヤ人が差別・迫害されたことは記憶に新しい。自分と異なる民族を服従させようとしてきた歴史がこういった人種差別を生んだのだろう。

ところで、ローナ・シンプソンはアフリカ系アメリカ人(黒人)である。彼女が自分の人種からどんな影響を受けたのか、彼女が生まれた 1960 年前後から現代にいたるまでの歴史を振り返りながら考えてみよう。

(2)　アフリカ系アメリカ人の歴史―現代

はじめてアフリカ人が奴隷としてアメリカ大陸に連れてこられたのは 1441 年のことだった。それ以来現代にいたるまで、アフリカ系アメリカ人は差別と戦ってこなければならなかった。ここではシンプソンの生まれた 1960 年前後から現代にいたるまでの歴史を見ることにする。

1956	ｱﾗﾊﾞﾏ大学に黒人学生がはじめて入学
1957	公民権法(黒人の投票権保護)成立
1962	黒人学生のﾐｼｼｯﾋﾟ大学入学を巡って暴動発生
1963	ｱﾗﾊﾞﾏ州ﾊﾞｰﾐﾝｶﾞﾑで人種差別反対ﾃﾞﾓが始まる
	ﾜｼﾝﾄﾝで人種差別反対の自由行進
	ケネディ大統領暗殺
1964	ﾏｰﾁﾝ・ﾙｰｻｰ・ｷﾝｸﾞ牧師、ﾉｰﾍﾞﾙ平和賞を受賞
1965	マルコム X の暗殺
1966	ﾛﾊﾞｰﾄ・ｳｨｰｳﾞｧｰ初の黒人官僚となる
	ｶｰﾏｲｹﾙの「ﾌﾞﾗｯｸ・ﾊﾟﾜｰ」
	ﾌﾞﾗｯｸ・ﾊﾟﾝｻｰ党結成
1967	各地で黒人暴動
1968	キング牧師暗殺
1972	ｴｽﾆｯｸ・ﾍﾘﾃｯｼﾞ法(民族文化遺産振興法)の制定
1982	ﾋﾟｭﾘｯﾂｱｰ賞を黒人女性作家がはじめて受賞(ｱﾘｽ・ｳｫｰｶｰ)
	ミス・アメリカに初の黒人女性
1983	1 月の第 3 月曜日が M・L・ｷﾝｸﾞ・ﾃﾞｲとして祝日に制定する法案が採択
1992	M・L・ｷﾝｸﾞ・ﾃﾞｲ施行

シンプソンが生まれた 1960 年前後は、黒人たちが、自分たちの権利を獲得しようとする公民権運動がますます盛んになっていた時期だった。キング牧師や、マルコム X、カーマイケルなど、黒人の地位向上に努める人々が立ち上がり、激しい運動が展開された。

1970 年代を経て、1980 年代に入ると、黒人たちの地位の向上が見られるようになってきた。例えばアリス・ウォーカーのピュリッツアー賞受賞、ミス・アメリカに初の黒人女性が輝くなどである。政治においても、初の国連大使、初の黒人州知事など、黒人は各界にどんどん進出していった。

その一方で、黒人内部での階層分化が進行し、富裕層と貧困層の差が大きくなってきた。しかも乳児死亡率、低体重児誕生率が白人に比べてかなり多く、増加の傾向にあった。貧困層の黒人たちの生活は苦しく、劣悪な住宅事情、家庭環境、

教育水準など、現在も状態は改善されていない。

(3)　シンプソンと人種差別

シンプソンは黒人の公民権運動が最高潮に達したころに幼年期を過ごし、黒人の地位が向上しつつあったころに多感な青春を送った。特に、アリス・ウォーカーなどの黒人女性解放運動を目の当たりにして、影響を受けたと思われる。

彼女の作品にはアフリカ系アメリカ人やアフリカの仮面など、自分の人種にかかわるさまざまなモチーフが出てくるが、それは彼女自身の人種に対する訴えかけであるだろう。

第 4 章　「性差」について

(1)　性差とは何か・性差別とは何か

男性と女性は違うものである。前者は産まない性であり、後者は産む性である。また、身体的特徴や脳の構造も男女では異なっている。

では、この身体的な違いだけが性差であるのだろうか。答えは否である。

性差とは、身体的に男であるか女であるかということであるが、身体的な部分だけでなく、身体に関して発生する男女の差異のことをいう。それらは社会的・文化的にに作られてきた。例えば服装であったり、社会的な役割分担であったり、そういうものを一括して「性差」と呼ぶのである。

性差別は、そういった身体上の特徴からそれぞれの性をこうあるべきものと固定化し、男女の優先順位などを決めてしまうことによって、特に女性を社会的・文化的に差別したり、害を加えることである。こういった性差別によってセクシュアル・ハラスメントやレイプなどの被害が起こっている。その他にも、身体的特徴にとらわれない精神の性(例えばそれは同性愛であったり、トランスジェンダーであったりする)を差別するものも性差別である。

(2)　女性と男性―アフリカ系アメリカ人の場合

多くの国々で、「男は戦うもの、女は守るもの」という固定観念が深く植え付けられてしまっていたが、アフリカ系アメリカ人の場合においてもそれは同様であった。

奴隷として働かされている弱者という点で、アフリカ系アメリカ人の男女は同じ立場に立てたはずであるが、状況はそうではなかった。同じアフリカ系アメリカ人でありながら、女性たちは男性たちよりもいっそう悪い立場にあったのだ。アフリカ系アメリカ人男性からアフリカ系アメリカ人女性に対する暴力・虐待は白人男性から黒人女性に対するそれよりも多かった。

しかし、内部の恥をさらすことを恐れて、長年、アフリカ系アメリカ人女性たちは理不尽な暴力に耐えてきた。

(3)　ローナ・シンプソンと性差別

ところが、アフリカ系アメリカ人女性の地位向上運動が盛んになってくると、まず内部から見直そうという機運が高まり、アリス・ウォーカー、ヌトザケ・シャンゲ、グロリア・ネイラーなど、アフリカ系アメリカ人女性作家たちによって、アフリカ系アメリカ人男性たちの暴力・虐待の内部告発小説が発表され始めた。

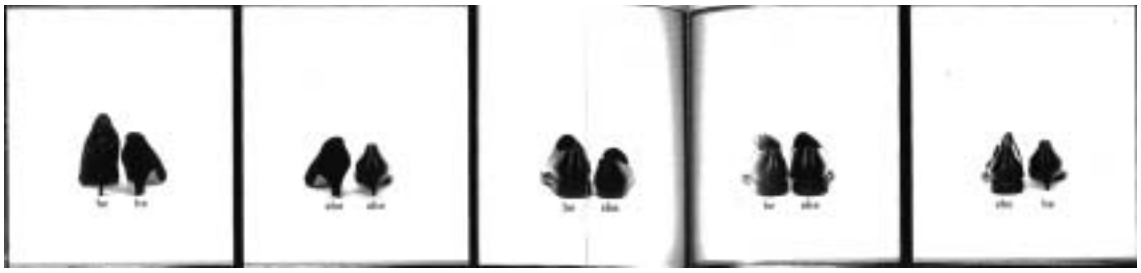
これが、シンプソンが青春時代のころの話である。シンプソンはこれらの作品によって、

「性」というものや性別による役割、偏見などについて考え、性差別に対して反対する気持ちを高めたであろう。

第 5 章　作品創作の方法と姿勢

これまでローナ･シンプソンがどのようなものをテーマにしているのかを見てきたが、今度はそのテーマをどう作品に昇華させるのかを見ていきたいと思う。

ローナ･シンプソンの作品の最も大きな特徴は、それが写真といくつかの文章･単語によって構成されているということである。序章で述べた靴のペアの写真 (*Untitled*) を例として取り上げよう。



Untitled, 1992

(企画･監修:東京写真美術館　『ポラロイド･コレクション「アメリカ　写真の世紀」』より)

上の写真を見れば分かるように、靴の下には he あるいは she という単語がついている。ところが、靴の性別と he または she という単語が一致していないことがある。これは何を意味しているのだろうか。また、それぞれの靴のペアはどういう意味なのだろうか。

私たちはここで考える。この写真は何を意味しているのだろうか、と。ひとつの解釈として、靴のペアはカップルを表しているととらえることが出来る。

しかし、ここで問題になるのは、ローナ･シンプソンが何を伝えたくてこの写真を撮ったのかということや、私がこの写真をどう解釈しているか、ということではない。もしローナ･シンプソンに意図があるとすれば、「私たちはここで考える」というまさにその一文に尽きる。つまり、彼女は写真を見る人が、その写真について何かを考えることを意図しているのだ。解釈は限定されていない。解釈に意味があるのではなく、解釈をする人間が写真に意味を見つけるのだ。

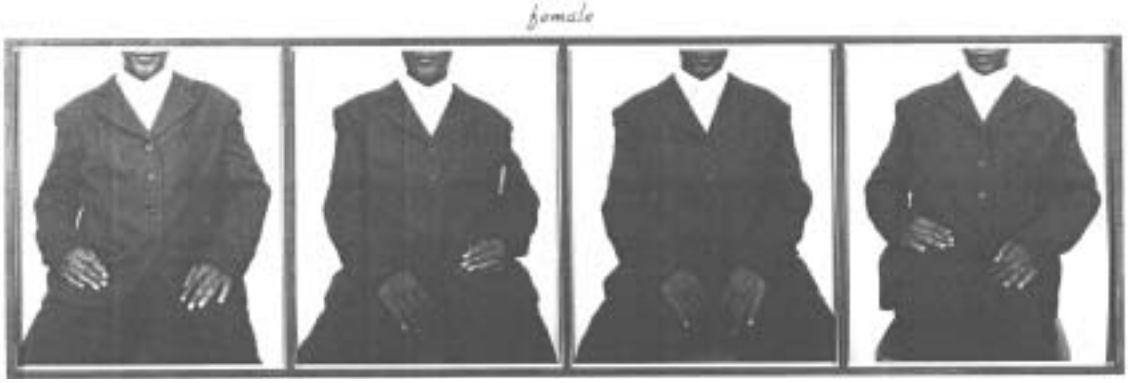
さて、このようにローナ･シンプソンの作品は、見る人が何かを感じ取り、意味を見つけることを意図して作られたわけであるが、そのような意図を実現するために彼女はどのような手法で作品を創作しているのだろうか。

この節の初めで述べたように、彼女の作品の最も大きな特徴は、それが写真とテキストによって構成されているということである。彼女の手法はこの写真とテキストを効果的に配置し、見る人の興味を引こうとするものである。

先ほどの ”*Untitled*” をもう一度例として取り上げる。この作品でポイントとなるのは、まず、靴の写真と he, she というテキストである。そして最も大切なポイントは、異なる靴がペアになっていることと、靴の下の he, she というテキストが必ずしも靴の性別と一致していないことである。靴、もしくは he, she というテキストのみを見れば、取り立てて変わった印象を受けるわけではない。しかし、異なる靴のペア、靴につけられたテキストとい

う要素がすべてそろうと、どこかちぐはぐで奇妙な印象を受け、見る人によってはそこに何か意味を与えるかもしれない。

もうひとつ例を挙げてみよう。



She, 1992

(Deborah Willis, "Lorna Simpson" より)

上の写真は、"*She*" というタイトルの作品である。この作品は、横に連続して並べられた4枚の写真と、それらの上につけられた "female" (女性)というテキストから成り立っている。4枚の写真にはいずれも、スーツを着て腰かけた人物がちょうど口からひざの部分まで写っている。この写真を一見しただけでは、写真の人物が男か女かは分からないだろう。むしろ、スーツといかにも男性がしそうなしぐさから、男であると思うかもしれない。ところが、これらの写真の上につけられたテキストは "female" なのである。この不調和・ちぐはぐさに、私たちは「おや?」と首をかしげるだろう。

つまり、シンプソンは見る人の興味を引くために、写真とテキストの効果的な選択と配置によるちぐはぐさを演出しているのだと考えられる。そして、作品の創作(演出)を行うに当たって、シンプソンは極めて慎重に写真とテキストを選び出し、配置しているのである。私が特に目を引かれたのは、テキストの選択であった。

彼女にとって、テキストは決して写真の添え物ではない。写真とテキストは連動してひとつの作品をなしている。彼女は写真と同じくらいにテキストを大切にしているのだ。いや、テキストをより重要視していると言ってもよいかもしれない。彼女は言葉が持つ力(それはだいたい固定化されたイメージを与えるという力だが)を利用して、テキストと写真とのギャップを演出しているのだ。そして、作品を見る人に意味を見つけさせようとしている。

終　章

ローナ・シンプソンが作品であらわしたかったものは、とてもあいまいな輪郭を持っていて、輪郭をはっきりさせようとすることはほとんど不可能に近い。しかし、それでいいのだ。私たちはアフリカ系アメリカ人ではないし、女性でもないかもしれない。理解できなくて、当たり前なのである。理解しようとするのは驕りだと私は思っている。理解しなくてもいい。わけのわからない作品であってもいい。それを見て、何かおかしい、何かが変だ、わからない、と感じることがすでにローナ・シンプソンの作品を見ていることになるの

だ。そこから、どうして変なのだろうと考え始めれば、シンプソンの作品を通して、私たちは社会の暗い部分についても考え始めたことになると思う。
　作品自体に意味があるのかないのかは、たぶん、見ている私たちが決めることなのだ。
　それは人生の大方の事柄においても同じかもしれない。

終わりに

　資料の少なさに悩まされたテーマでした。
　ローナ・シンプソンという人が、一体どういう人生を送ってきたのか、未だによく分りません。しかし、彼女の言葉を少しでも見ることができて、彼女の創作に対する姿勢はどのようなものか、以前よりは分かっていると思っています。芸術家が自分のアイデンティティをかけて創作した作品に対して、このレポートはあまりにも小さすぎますが…。
　最後に、このテーマに対してご意見をくださった先生方、どうもありがとうございました。

参考資料

小林憲二　『アメリカ文化のいま　人種・ジェンダー・階級』(ミネルヴァ書房、1995 年)
佐伯彰一他　編　『アメリカ　ハンドブック』(三省堂、1992 年)
沢渡要　『歴史物語アフリカ系アメリカ人』(朝日新聞社、2000 年)
福田陸太郎　編著　『ｱﾒﾘｶ文学思潮史　―社会と文学―』(中教出版、1976 年)、第 7 章
渡辺和子　『アメリカ研究とジェンダー』(世界思想社、1997 年)
Willis, Deborah. *Lorna Simpson*. New York: D.A.P/Distributed Art Publishers, 1992

〔コメント〕
　竹澤さんはアメリカの黒人女性写真家のローナ・シンプソンの作品を取り上げて、分析を試みました。シンプソンは 1960 年生まれの、アメリカで活躍中の写真家で、黒人の公民権運動の盛んな時代に育ち、従来のものとは異なる価値観を生み出したヴェトナム戦争後の激しい社会の変動の中で「黒人であり」、「女性である」というそれまで虐げられてきた存在を見直すために、「写真」という手段を用いて観る人に訴えかける手段を用いました。竹澤さんは、シンプソンが辿ったであろう黒人の歴史、居住区域などに焦点をおいて、実際の作品を通して伝わってくるものを探ろうとしました。この論をまとめる過程で、さまざまな差別に対する思いを深められたことが伝わってきます。
　シンプソンはあまり日本では知られていないため海外から資料を取り寄せるなど苦労しましたが、集められた限りある情報の中で、おそらく日本ではあまり考察されたことのないトピックをユニークな手法でまとめられたと思います。この写真家はわれわれと同時代で「現在進行形」ですから、今後のアメリカの行方をどのようにカメラに収めるのかということを追うことも興味深いことだと思います。　（相浦　玲子）